

1. 小稿の目的

富山市婦中町には、平成 17 年 3 月に追加指定および名称変更された史跡王塚・千坊山遺跡群がある。北陸地方における弥生時代から古墳時代にかけての動向を示す良好な事例との理由で追加指定された本遺跡群には、四隅突出型墳丘墓や前方後方墳などの墳墓だけでなく、同時期の集落も確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての地域社会の変遷を辿れる良好な文化遺産として各方面の注目を浴びている。しかしながら、埋蔵文化財の範囲や性格等を把握するための試掘調査で得られた情報量は、遺跡群がもつ情報量からすると遥かに少なく、すでに煙滅した遺跡もある。限られた情報のなかでも、仮説として提示された地域像は検証され続けなければならない。小稿では、その前提作業の一つとして、史跡との関連性が想定される添の山古墳を検討する。

2. 調査研究略史

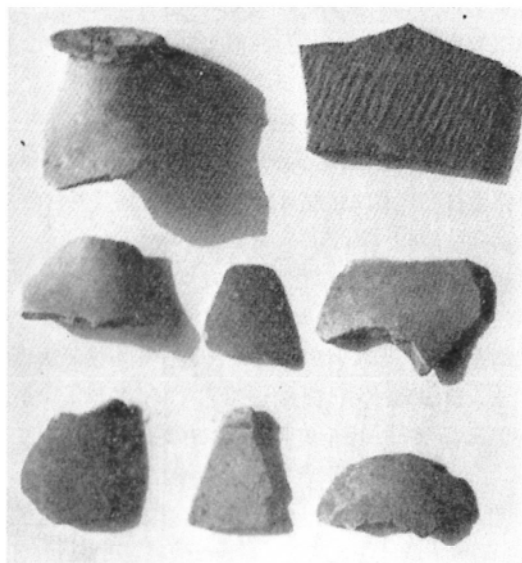
調査 添の山古墳は、昭和 41 年の土取り工事によって煙滅したが、岡崎卯一氏によって工事に先立ち緊急調査が行われた。岡崎氏（岡崎 1966・1967・1969）によれば、外形は約 26m×24m、高さ約 3m（二段築成）で隅丸方形を呈し、周溝をもつという。また、墳丘の中央から西寄りで確認された長径約 2.1m、短径約 1.3m、深さ約 1.7m の小判形の「凹所」があり、褐色の砂質土などが堆積していた。その西南には急に落ち込んだ入口らしい部分があったという。この砂質土から古墳時代の土師器片数十と、須恵器片 1 が出土したとされる。岡崎氏は、これらの土器片は混入品と判断した（岡崎 1966, p. 2）。古墳の年代については、後期古墳は再び山頂に築かれることが多いとの理由から、6～7 世紀頃と位置づけた（岡崎 1967, pp. 76-78）。凹所については、当初は判断に苦慮していた（岡崎 1967）が、最終的には埋葬施設との判断に至った（岡崎 1969）。

現在、出土品は所在不明だが、一部の写真は『婦中町史』に掲載されている（岡崎 1967, p. 78）。写真判断なので詳細な時期の特定はできないが、提示された土師器片のなかには弥生時代後期～古墳時代前期の高坏や器台の脚部が含まれているようだ。須恵器の年代は想定不能である。

研究 藤田富士夫氏は、方墳で上部に広い平坦面を有し、土壇形式の埋葬施設をもつなどの特徴から、古墳出現期の比較的早い段階に築かれた二段築成の墳丘墓の可能性を想定した。北東－南西辺を長くする傾向が婦中町富崎千里古墳群の特色と類似することに注目し、古墳群と同様の性格をもつと推定した（藤田 1997）。

千坊山遺跡群の試掘調査報告書でも、地元住民への聞き取り調査を加味しながら、先行研究（岡崎 1969・藤田 1997）の認識を基本的には継承している。南西に位置する六治古塚墳墓（四隅突出型墳丘墓）と規模が類似することから、二段築成の方形墳丘墓としつつも、四隅突出型墳丘墓の可能性も否定していない。基盤集落と推定する、谷を挟んだ千坊山遺跡と併行する時期と考えた場合、古墳の年代は月影式期に比定されることを指摘した（婦中町教育委員会 2002, p. 77）。

筆者は、出土地点の断面見取図の検討から、遺



砂質土からの出土品（抜粋）
（岡崎 1967）

物は後世の混入品と解釈した。千坊山遺跡に隣接する墳墓遺跡は、最寄りの添の山古墳の他に、石川県加賀地域の漆町遺跡編年（田嶋 1986）4 群期の六治古塚墳墓、同 6 群期の向野塚墳墓がある。墳墓の形状や集落の消長も考慮して、添の山古墳が同 5 群期の方形墳丘墓である可能性を想定できることを指摘した。千坊山遺跡を残した集団は、四隅突出→方→前方後方の順で墓を築き、隣接集団に先んじて新たな墓制を採用したと評価した（小黑 2007, p. 24）。前稿では遺物を後世の混入品と解釈した根拠を提示できなかったのも、小稿ではその点も詳述したい。

3. 段築ほかの検討

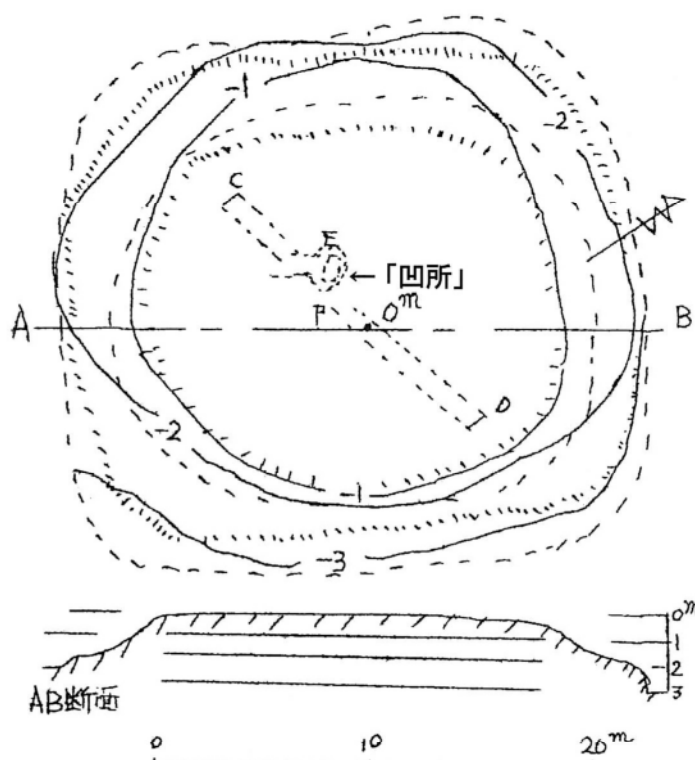
緊急調査以来、添の山古墳は二段築成との評価が定着した感がある。しかしながら、果たしてそう言い切ってよいものであろうか。

筆者は何度考えても疑問を拭い去ることができない。それは、筆者を含め、いわゆる出現期古墳⁽¹⁾と評価する見解が多いなかで、段築の存在を認めて良いかということである。

確かに、測量図からはそのように見えなくもない。ただ、等高線（1 m 間隔）の流れからは明確に段築を認めることができない。点線表記された傾斜変換線を AB 断面図と対比すると、墳丘北辺・南辺とも幅 2m 未満のテラス状の平坦面を読み取ることにはできる。しかし、その平坦面も上端と下端の間に 50cm 程度の高低差がある。仮に、上端の傾斜変換線付近に流土が堆積していることを想定しても、テラスとしては斜度がきつい感がある。

平面図に示された 4 本の傾斜変換線のうち、下部の 2 本は比較的方形に近いものとなっているが、上部 2 本は円形に近い。テラス状の平坦面は上から 2 本目と 3 本目の傾斜変換線の間に相当するが、隅角部分は水平距離が他より長い。当該平坦面がテラスであれば、このような特徴は、段築をもつ方墳の一般的なあり方とは様相を異にする。隅角部分が幅広となるテラスは想定しにくいので、墳丘中位が崩落したり、削られたりするなかで、テラスに類する平坦面が形成されたと解釈するのが妥当ではなかろうか。

北陸では、段築をもつ古墳に限られる。富山県域では、調査で存在が確認されたのは全長 107.5m の大型



添の山古墳測量図（岡崎 1966 に加筆）



添の山古墳の立地（国土地理院撮影写真(1961 年)に加筆）

写真上が東、谷を挟んだ南側の台地は千坊山遺跡

前方後方墳である氷見市柳田布尾山古墳（古墳時代前期後半）と直径 46m の大型円墳である立山町稚児塚古墳（古墳時代中期）のみである。出現期古墳で段築をもつ事例がないばかりか、婦負地域では添の山古墳以外に候補すらない。このようななか、添の山古墳に段築を認めることには違和感があり、前稿（小黑 2007）で添の山古墳を評価した際、二段築成という認識は引用しなかった。

類例が乏しいということだけで段築の存在を否定することはできないが、何よりも北陸の古墳における段築のあり方（段築をもつ古墳の時期・墳丘規模）を重視したい。さらに、上述した測量図の検討結果も念頭に置くと、やはり添の山古墳に段築は存在せず、テラス状に見える平坦面は後世の改変等に起因している蓋然性が高いと判断すべきだろう。

添の山古墳は改変を被る過程で、墳頂平坦面の隅角部分が丸まっている。また、AB 断面図上での墳端は垂直に近い状態箇所もあり、墳端も部分的に改変を被っていることは明らかである。地籍図から存在が推定された周溝は調査される間もなく煙滅したので、今となっては検証不能だが、本来の墳端は若干外側に広がり、それに伴って墳丘規模も、報告された外形の規模よりは若干大きかったと考えられる。六治古塚墳墓との墳丘規模の類似性のみから、添の山古墳に四隅突出型墳丘墓の可能性を残すことは避けるべきだろう。

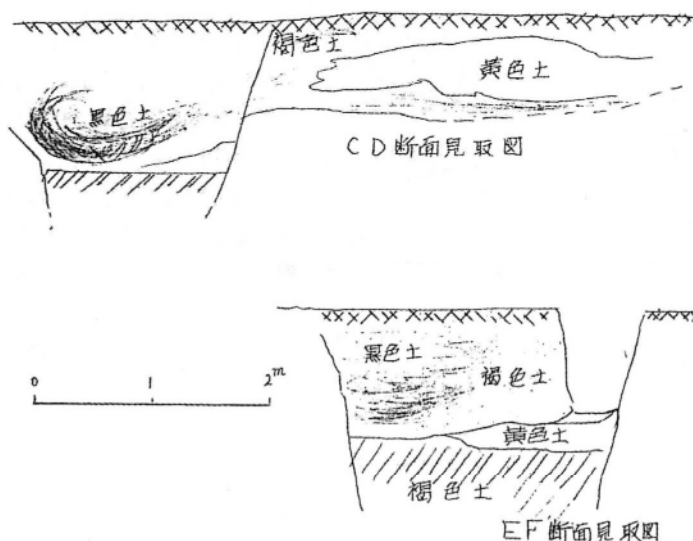
4. 「凹所」の検討

先学は、いずれも凹所を埋葬施設と解釈している。筆者が疑問を抱くのは、①南西に接続する入口らしき急激な落ち込みの存在、②凹所の深さである。砂質土を追求した結果、落ち込みを含む凹所が現れているので、落ち込み部分は小判形の部分と一連のものということになる。つまり、凹所の平面形態は小判形ではなく、隅丸 T 字形なのである（測量図参照）。

平面形態の検討 管見ながら、竪穴系埋葬施設で墓壙が隅丸 T 字形のものはない。横穴系埋葬施設では、いわゆる T 字形横穴式石室の石室掘り方を想定することも不可能ではない。横穴式石室の石室掘り方であれば、約 1.7m という深さであっても大きな問題にはならないからである。T 字形石室は、全国的に事例が限られるなか、北陸では能登の七尾市須曾蝦夷穴古墳（東石室：雄穴）・羽咋市柴垣ところ塚古墳で確認されており、婦負地域に存在した可能性はゼロではない。しかしながら、石材が全く確認されていないことや富山県域では横穴式石室墳がごく少数に限られ、横穴墓が盛行したことを勘案すると、その可能性を想定することは難しい。また、添の山古墳の急激な落ち込みは、T 字形石室の平坦な羨道とは様相を異にする。この点からも、凹所は、石材がすべて抜き取られた横穴式石室の石室掘り方である可能性はないと判断すべきであろう。

深さの検討 横穴系埋葬施設に関連したものでないとする、凹所が埋葬施設であるなら、それは竪穴系埋葬施設でしかないことになる。仮に、落ち込み部分が小判形部分と一連のものではないとしても、小判形部分の深さが約 1.7m という状況をどのように理解すればよいのかという疑問が残る。

断面見取図下部にある斜線部分の土がどのような性格をもつのか明記されていないが、報告された深さとほぼ合致するので、当該部も凹所内の埋土と理解するのが妥当だろう。小判形部分の平面規模だけをみれば、墓壙であっても良い。ただ、その規模に対して深さ約 1.7m というのは深すぎる感があり、墓壙と認定するには違和感を覚える。



添の山古墳断面見取図（岡崎 1966）

丹後の京都府峰山町赤坂今井墳丘墓（方形：39m×36m×4m）の第一埋葬は、弥生時代の日本列島で最大の墓壇（14m×10.5m）をもつが、それでも深さは2m超に留まる。近隣の六治古塚墳墓では、添の山古墳と同様に表土直下で墓壇が確認されているが、その幅が3mにも及ぶことや墳丘中央部に位置することは、添の山古墳と対照的であり、示唆的でもある。

小結 以上の検討から、筆者は凹所を墓壇と解釈しない方が良いと判断している。では、どのように解釈すべきなのか。それは、盗掘等による攪乱穴である。落ち込み部分は出入口として設けられたと考える。攪乱を被った時期は特定できないが、可能性の一つとしては凹所から出土した最新遺物である須恵器が使われた時期を想定できる。古墳時代中期～平安時代のいずれかの時期に攪乱を被った際、須恵器片が混入したと考えられよう。弥生時代後期～古墳時代前期のものらしき土器片を含む一群は、墳丘盛土に紛れていたもの、もしくは葬送儀礼で用いられたものが混入したことになる。他にも、須恵器片自体が後世の混入品であった可能性もあり、この場合は攪乱を被った時期がさらに下ることになる。

5. 歴史的評価

筆者は、1に記したように、添の山古墳が漆町遺跡編年5群期の方形墳丘墓の可能性が高いと考えた⁽²⁾。本墳は、先行すると考えられる六治古塚墳墓と比べて、高さは1mほど低い（六治古塚墳墓の主丘部の現地表面での墳端と比較）が、平面規模はわずかに大きい。方形基調であることや千坊山遺跡に隣接することから、これらが密接な関係にあったと考えることは許されるだろう。

羽根丘陵⁽³⁾では、漆町遺跡編年4群期で四隅突出型墳丘墓の造営が終焉を迎える。千坊山遺跡を残した集団の首長墓と考えられる六治古塚墳墓がその一つである。富崎遺跡を残した集団の首長墓と考えられる富崎1号墓も、その可能性を想定して良い⁽⁴⁾。四隅突出型墳丘墓の終焉後に営まれた弥生時代の首長墓は添の山古墳（方形墳丘墓）と向野塚墳墓（前方後方形墳丘墓）のみであり、いずれも千坊山遺跡に隣接する。千坊山遺跡は他の集落と異なり、見晴らしの良い台地上に立地する（写真参照）こともあわせ、4群期までは等質的だった羽根丘陵の3集団のなかで、5・6群期は千坊山遺跡を残した集団が中核的な存在になったと考えられる（小黑2007, pp.23-24）。千坊山遺跡を残した集団は、連携の証だった四隅突出型墳丘墓の造営を取りやめ、六治古塚墳墓とほぼ同規模ながらも連携の解消を示すかのように、新たなカタチの墓（添の山古墳）を造営したのであろう。さらに、次世代になると、他地域の集団との関係をもとに得た情報から、再度新たな墓制を採用し、それが古墳時代的大型前方後方墳（勅使塚古墳・王塚古墳）の成立へとつながっていく。添の山古墳の被葬者は、羽根丘陵で成立した地域勢力が再編される際、主導的立場にあり、千坊山遺跡を残した集団が地域勢力内部で覇権を握る端緒になった人物と考えられるのではなかろうか。

<註>

- (1) 弥生時代後期後半～古墳時代前期前半に造営された墳丘盛土を持つ墓の総称として、いわゆる出現期古墳と呼称する（以下では、出現期古墳と表記する）。
- (2) 岡崎氏は台地上に別の小型墳1基を認識しており（岡崎1967・1969）、本遺跡は古墳群であることがわかる。
- (3) 狭義の羽根丘陵・富崎丘陵・千坊山丘陵をあわせて、羽根丘陵とする。
- (4) 周辺からの採集品（造成工事中の不時発見品）を時期認定根拠としているため、確定はできない。

<引用・参考文献>

- 大野英子 2007 『王塚・千坊山遺跡群 富山平野の弥生墳丘墓と古墳群』日本の遺跡18 同成社
岡崎卯一 1966 「婦中町添の山古墳の調査 中間報告」『連絡紙8』pp.1-3 富山考古学会
岡崎卯一 1967 「町のあけぼの」『婦中町史』pp.41-88 婦中町
岡崎卯一 1969 「考古学上よりみた古墳時代の富山」『富山高等学校教育研究会紀要1969』
小黑智久 2007 「勅使塚古墳と王塚古墳」『大境—富山考古学会機関誌—』第27号 pp.11-28 富山考古学会
田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡I』pp.108~186 石川県立埋蔵文化財センター
藤田富士夫 1997 「添の山古墳」『婦中町史』資料編 p.38 婦中町
婦中町教育委員会 2002 『富山県婦中町 千坊山遺跡群試掘調査 報告書』